OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「栂ノ木寮」建設あれこれ
Author(s)	紙野, 桂人
Citation	大阪大学史紀要. 1981, 1, p. 120-123
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6787
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〔回　想〕

「栂の木寮」建設あれこれ

紙野桂人

大阪大学厚生施設「栂の木寮」、所在地　長野県北安曇郡小谷村栂池神の田圃、木造二階建、延面積一五六平方メートル、収容人数四十名、管理人　猪股直衛、昭和三十七年十一月十一日竣工。

北アルプス白馬山系乗鞍岳（標高二四三六・七m）の中腹、標高約一七〇〇メートルの湿原「神ノ田圃」のすぐ南にあって、周囲を栂の自然林で囲まれている。

神の田圃の西側には古くから早大小屋がある。栂の木寮の管理を担当している猪股氏はもともと早大小屋の管理を担当していた人である。早大小屋からやや上の栂池湿原に向けて登る白馬岳への登山道に沿って、大阪経済大、成城大等の小屋が建っている。成城大の小屋とその上の栂池山荘（私営）とはかなり以前からあるが、大経大の小屋は栂の木寮の少し前に建ったものである。

栂の木寮の南側の窓からは、小蓮華・大蓮華（白馬岳）・杓子などの白馬連山がのぞめる。湿原「神ノ田圃」にはいろいろの湿地植物がある。もとの登山道はこの湿地帯の端を抜けていたので、一時夏山登山者の増加につれて荒れる傾向にあったが、その後、南側に林道が通り、夏山登山者の足から遠くなったためにかえって旧態を取りもどしつつあると聞いた。

田圃の北側にある鵯峰（標高一九〇六m）は、夏にはなんでもない様子であるが、この山腹の秋の紅葉は実に素晴しい。湿原を前に置いて美事な錦織を広げて見せてくれる。春の新緑の頃も美しいはずであるが、残念ながら私は見ていない。冬は言うまでもなく雪が深い。しかしこの小屋の附近には雪崩の経験はない。鵯峰の東側では昔あったらしい。

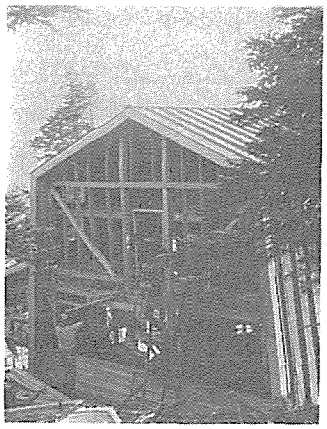
この寮が竣工した昭和三十七年当時には、林道はまだ小屋の附近に入っていなかった。小屋に至るには、標高約八〇〇メートルの山麓に広がっている高原地帯「親ノ原」の草原を抜けて、赤抜の頭・御殿場小屋・栂大門と急坂をたどりながら約一時間半かけて、神ノ田圃に登りついたものである。現在では林道が栂池湿原まで附いて、小屋の直近まで乗用車で上って来れるし、電気もついた。しかし、当時はランプに頼るしかなかった。寮から下の斜面は、現在栂池高原スキー場となって冬季ににぎわっているが、これまた当時は、通称「鐘の鳴る丘」にリフトが一本入っているだけであった。親ノ原は茫々たる草原に包まれ、民家は沓掛と松沢・落倉あたりに数軒づつ散在していた程度であったと思う。

竣工後十五年目の夏に親ノ原から寮までの旧道をたどってみたが、林道でずたずたになり、道はブッシュ化して歩けたものではなかった。赤抜の頭あたりは全く面影を失ってしまっていた。その時すでに、十五年前は昔の話なのだと実感せざるを得なかった。かつて大学院工学

研究科に在籍していて、栂ノ木寮の設計を手掛けた私としては、二十年後の今となってもそれほどの時間の感覚は無いのであるが。

話の始まりが昭和三十五年の秋であったか、それとも昭和三十六年の春であったか、今となってははっきりしないのであるが、工学部東野田学舎の私達大学院生がとぐろを巻いていた一室に、構築工学科（現在土木工学科・建築工学科に分かれている）の後輩で山岳部員であった梶本政良・打出英樹の両君がやって来て、山小屋設計の手助けをして欲しいと言い出したのが私にとっての事の起りであった。大学卒業以来四年ばかり経っていて、それまでに幾つかの住宅設計を手掛けて少し建築設計というものに眼が開いて来た所で、設計の仕事なら何でもやってみたい一心であったから、大喜びで仕事に乗り出したことは言うまでもない。

梶本氏は三十六年の春に大学を卒業し、打出氏も卒業研究の時期に入ったので、その年の春からは、山岳部の浜田氏（現山本・法学部）とスキー部の早石氏（医学部）の両氏が私の直接の相談の相手となったと記憶している。


栂の木寮

当時のスキー部と山岳部の両部長は、医学部の水野祥太郎教授（現名誉教授）と工学部の篠田軍治教授（現名誉教授）であった。両教授の寮建設についての熱意には頭の下がる思いをした。学生部の窓口は保田正次氏で、保田氏とは何度も一緒に信州の現地に出向いたものであった。寮建設の関係者では、施設課長であった大屋清彦氏が早く故人になっておられる。謹んでご冥福を祈りたい。

栂の木寮建設の話の起りは、スキー部が鹿島槍岳山麓の青木湖附近に部の小屋を造る話があり、それから始ったと聞いている。おなじ小屋を造るならば山岳部・ワンダーフォーゲル部も一体でということになって場所の検討に入ったが、青木湖の上の候補地は登山基地としてやや標高が低すぎるというので、第二候補として細野の八方尾根が浮び上った。これは細野在住で山岳・スキーの両部と永くつながりのある丸山さん一家のお世話によるものであった。この案は候補地として有力なものであったが、残念ながら八方尾根にはすでにいろいろの山小屋が建っており、水の問題などを考えると阪大が新たに割り込むのは困難ということで断念せざるを得なかったらしい。その後しばらくして、小谷村の人達が栂池に受入の意志を持っているという話が入り、関係者の話合いの結果、神の田圃に土地を借りて小屋を建てる方向でまとまったということである。

このように、話に多少の曲折はあったが、半年あまりの間に順調に話が運んだ背景には、現地の山岳関係者達と阪大の各部との間に永年にわたって築かれた信頼関係があったからであろう。

山小屋を神の田圃に造るという方針が出て、私もともども関係者一同が現地確認に登ったのは昭和三十六年の天皇誕生日であった。四月の信州はまだ肌寒い。里ではこぶしの白い花が盛りであった。標高千

メートルから上では雪が深く、冬山の様相を呈していた。現地を確認して山を降ったが、親ノ原の手前で日が暮れてしまい、おまけに激しい雨に見舞われて全身ずぶぬれになった記憶がある。春の山の天候の変化は全く激しい。

かくして、冬季の深い雪に耐え、凍土にしっかりと根を下した建物を設計することが私の課題となった。いろいろ考えたあげく、柱で屋根を支える普通の木造建築の構造方式は採用しないで、傾斜の強い屋根をそのまま地面に支える形にすることとした。これは屋根に積る雪の荷重に対して有利であるし地盤に安定した形となる。地面に降り積る雪に埋れた場合の側圧には、二階の床が支えとなって耐えうる。小屋の内部について言うと、一階の食堂中央に据えたストーブの煙突を、二階の床に開けた開口部を通して立ち上げて、煙突の熱気と一階の暖い空気が二階の寝所に廻る様にした。これらの工夫は一応成功したように思う。屋根に張る鉄板の色は、通くからでも見えて目印になる様に、黄色のコーティングをしたものを注文しておいた。ところが工事が進んだ段階で確認に行ったら、施工側が間違えて水色の鉄板を張ってしまっていた。そこで初志を貫徹するために費用は施工者持ちで黄色の塗料を塗らせたものである。今は塗料がはげて少々見苦しくなっているかもしれない。

設計が終わって、大阪大学体育会の事業として入札に掛けたのは三十六年の秋であったか。その結果は惨憺たるもので、予定金額の三倍近いものが一件入札されただけであった。

やむなく、関係者が現地の施工業者と膝詰めで交渉して話をまとめる事になった。設計上は当初の規模を若干縮小して、構造材に現地の杉材を使用する方向で調整した。しかし何といっても問題なのは、建設現場まで材料を如何にして運搬するかというその方法と費用の問題だったわけである。これはいろいろ検討の結果、結局人の力で担ぎあげるのが一番安くあがるということになった。要するに契約が成るか成らぬかは、施工業者の選定というよりも、工事をひき受けて呉れる意志のあるものは誰で、どのくらいの金額で納得して呉れるのかという話にあった。この点にしぼって関係者の努力が続いた。

篠田教授ら関係者に私も同道して、大町の土木建築請負業早川組に最後の交渉に出掛けたのは、三十七年の春であったと思う。

話は数時間に及んだが、両者約三〇万円の差が残った。かくてはならじと、頭から三〇万円値切ったものである。早川組社長・早川雪衛氏がこれに応じてくれた時は、正直言ってほっとした。そのときの工事費は八〇〇万円であった。私の仕事はこれで一段落したのだが、篠田・水野両部長を始め各部の人達には体育会としての資金集めが待っていた。皆さんのご苦労は大変なものであったろうと思う。

工事は七月に入って本格的となったが、工事契約の時の約束でもあり、資金集めの大義名分も立つとあって、体育会関係学生に若干の一般女子学生なども含めて、材料荷上げのキャラバン隊を発足させることになった。薬学部の女子学生は賄いかたに廻り、猪股氏宅ほか数軒の民家に分宿した学生達が、日が昇るとともに砂・砂利・セメントなどの資材を担いで、山道を往復していった。延九八〇人に及んだと聞いている。学生達の胃袋のために、南小谷附近の在所の鶏卵が無くな

ってしまうといったこともあって、この夏、親ノ原一帯は活気に満ちていた。この夏の現場のお蔭で私もすっかり山慣れしてしまい、上半身裸体で山を登り降りしたものであった。

十月に入って小屋はほぼ出来上り、特製の薪ストーブの製作と荷上げも終わって、竣工式をしたのが十一月十一日、快晴の秋の日であった。当時総長の赤堀四郎先生も、私と保田氏の先導で小屋に登られた。神の田圃で竣工式をして祝酒で乾杯し、単独で山を降りて夕日に暮れなずむ親ノ原をほろ酔いきげんで歩いたときの充実感は、私にとって一生忘れ難い思い出となった。

（かみの　けいじん　工学部）

大阪大学史紀要　原稿募集

〔紀要の構成〕

1　論文　　五〇枚程度（四〇〇字詰）
2　研究ノート　四〇枚―三〇枚
3　日記・回想
4　資料紹介

〔紀要の刊行〕

年二回（春・秋）を予定しています。

原稿締切は春季号は二月末、秋季号は九月末といたします。

紀要の内容については、わが国の近代高等教育の発達史との関連から本学の歴史を眺めるとともに、またわが国の大商工業都市という環境のなかではぐくまれてきた歴史を、前史時代を含めて広い視野のなかから把えたものにしたいと考えております。

本学はこれまで本格的な編史の試みがなされていないので、これを機に、本学の歴史に関連する広範囲の資料の収集に努力しており、それらに関する資料紹介もできるだけ収録する方針です。

執筆者についても、学内外を問わず、広く多くの人びとのご参加をねがって本紀要の内容の充実とともに、進行中の『大阪大学五十年史』をより内容の豊かなものにしたいと考えていますので、各位の積極的なご投稿をお待ちする次第です。

〔投稿先〕

豊中市待兼山町一―一
大阪大学附属図書館内
大阪大学五十年史資料・編集室
（電話）〇六―八四四―一一五一
内線二一〇一・二一〇五